

2025年9月7日 第二礼拝

説教題『ゴミ箱行きの「ホコリ」』使徒言行録9章19節b～25節、第二コリント11章30～33節

主任牧師 加藤 誠

「誇る必要があるなら、わたしの弱さにかかわる事柄を誇りましょう。」「わたしは、窓から城壁づたいにつり降ろされて。彼の手を逃れたのでした。」(第二コリント11:30、33)

「誇り」は大切なものです。「自慢する」「誇示する(見せつける)」ような「誇り」は人と人との関係を壊していくものですが、例えば「自分の仕事に誇りを持つ」ことは大切なことです。自分に取り組んでいることを肯定できて、自信をもって最善を尽くす。ひいては自分自身の存在を肯定できることは、前向きに生きる上で大切な「誇り」です。逆に「自分の仕事に誇りが持てない」「自分が生きていることが肯定できない」状態では、私たちは明日に向かう力を持つことができません。ただ、そのように「持つべき誇り」がある一方で「持つべきでない誇り」がある。特にパウロが証している「誇り」について、今朝、聖書に聞いていきたいと思えます。

パウロはイスラエル民族の一員であることを大変「誇り」に思っている人であり、その「誇り」を求めて努力を惜しまなかった人です。パウロは「イスラエル民族として生まれ、正しい血筋の家庭に生まれたこと」を誇り、「ファリサイ派の一員として優秀な学びを重ねた自らの学業」を誇り、律法を落ち度なく完全に実行する「実践」を誇っていました。当時の一般人としては「最強の誇り」を手に入れた人と言って過言でないと思えます。しかし、そういう「誇り」は「生まれと血筋が正しくない人」「律法を学んでいない人」「実践できていない人」を上から見下しバッシングする生き方を生み出していました。パウロ自身はその問題性にはまったく気づきません。「自分は神の前に正しい」という「絶対的な誇り」にパウロは立っていたのです。

しかし、そのパウロが十字架のイエスと出会って地面に転ばされ、目が見えなくなり自分の力では歩くことができなくなり、「敵」と見なしていたアナニアに手を置いて祈ってもらうという衝撃的な出来事を通して、パウロは「目からうろこが落ち」、大きく変えられます。自分のそれまでの過ちに気づかされ、神の恵みと憐れみを知る者に変えられた時、それまでの「絶対的な誇り」は大きくひっくりかえされます。パウロの言葉によれば「キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、それらは塵あくた」、つまりゴミ箱行きの「ホコリ」となったのでした(フィリピ3:8)。

そのパウロが「間違った誇り」を列挙して語っている部分はなかなか面白く、私たちも胸を当てて考えるように促されます(第二コリント10～11章)。

①自分で自分のことを誇るな！ ②他人と比較して誇るな！ ③限度を超えて誇るな！(神や他人の働きを自分の手柄にするな！) ④苦勞を誇るな！

「誇り」は私たちが生きる上で大切なものですが、私たちがふだん「間違っただけの誇り」を求めがちであるかを示されます。なぜこれらは「間違っただけの誇り」なのか。それは私たちがキリスト・イエスの恵みから引き離すからです。神の前にほんとうは貧しい自分、他者の執り成しや配慮に支えられ、神の大きな愛と赦しに支えられている自分の姿を見えなくさせるからです。そして「間違っただけの誇り」は、隣人を見下すような間違っただけの関係に私たちを導きます。「間違っただけの誇り」は神との関係も、人との関係も壊してしまうものなのです。

それゆえパウロは語ります。「もし誇る必要があるなら、わたしは自分の弱さを誇ろう！」「誇る者は主を誇れ！」と。何という逆転の発想でしょうか。ふつう「自分の弱さ」は「恥ずかしいもの」「誇れないもの」です。しかしパウロにとって「弱さ」は、キリストの恵みを知り、神の愛と赦しを知り、さらに隣人の有難さを知る、大切なもの。「弱さ」がないと自分は簡単に神の愛から離れてしまう。それゆえ「自分の弱さを誇ろう」と語るのです。そのパウロがわざわざ言及しているのが「ダマスコの城壁から吊り降ろされた」出来事（使徒言行録9章）です。パウロにとって、それまでの自分の「間違っただけの誇り」を思い知らされ「キリスト・イエスの恵み」に立ち返らされる原点ともいえるべき出来事だったということでしょう。このときパウロはアナニアを通して「回心」しバプテスマを受けるやいなや、ただちにキリストを証しし始めます。昨日までキリストを憎悪していた男が、今日キリストの僕として福音を語り始める。その変わり身の早さに驚かされますが、それほどパウロにとってアナニアの祈りは衝撃的だったのです。しかし自信をもってキリストを語り始めたパウロは、ユダヤ人たちの激しい反発を生んだだけでなく、新たに仲間に加えてもらうべきキリスト教徒たちからも敬遠されます。八方ふさがりの孤立無援の中で、パウロはこの時ほど自らの小ささ、貧しさ、無力さを思い知らされ、自らの存在意味を見失ったことはなかったのではないかと想像します。ただただ人の手に自分の命をゆだねて城壁伝いに吊り降ろされるしかない、小さくみじめな自分を思い知らされて、パウロの誇りがズタズタにされた出来事。しかしこの出来事が伝道者パウロの原点となったのです。福音のためにどれほど困難に遭ってどれだけ犠牲を払ったか。いくらでも自分の働きを誇ることができるときにも、パウロは「しかし働いたのはわたしではなく、神の恵みなのです」と主なる神を誇る者とされたのです。「俺はすごい／俺は頑張っている！」と自分をほめる世界に生きていたパウロは、「神は素晴らしい／罪ある者を赦し用いられる主の恵みはすごい！」と、神を賛美して生きる世界に捕え移されたのでした。私たちがパウロに学びながら「間違っただけの誇り」をゴミ箱に捨てて、「自分の弱さ」を誇り、小さなものを豊かに用いてくださる「主の愛と赦しと恵み」を感謝して誇る歩みをささげていきましょう（エレミヤ書9：22～23）。

